

ぐんま幼児教育センターだより

第33号

群馬県総合教育センター 幼児教育センター 平成30年9月発行



できることできないこと

群馬県総合教育センター
所長 野村 晃男

昨年7月に発行したセンターだより第30号に、「モデリング」という題で、初孫が生まれたことを取り上げ、「子どもは命じられたり教えられたりすることよりも、周りの誰かをお手本に真似をすることによって学んでいくこと」「親の方が意識していなくても、子どもは大人の姿から、仕草や行動、ものの考え方などを吸収していること」「孫のモデルになれるよう、今までの言動を振り返り、反省している毎日であること」などを書かせていただきました。

その孫も1歳2ヶ月になり、よちよち歩きを始めました。1歳になる頃から、いろいろなボタンに興味を持ち出し、扇風機のスイッチを押したり、テレビのリモコンをいじったりしています。電話の子機をいじっている時は、110番にかかりはしないかと心配です。

先日、テーブルの上に置いてあった母親のスマホの画面に人差し指を当て、左右に動かしているのを見て驚きました。まさに、画面をスワイプしているのです。「親の仕草をよく見ているのだなあ」と感心しました。

我が家に泊まる時は、私がお風呂に入れるのですが、湯舟に沈んで「1, 2, 3・・・」と数えることも面白いようで、数にも興味が出ています。ご飯の時間になると、テーブルの前の小さな椅子に座り、両手を合わせて「いただきます」のポーズをし、正確ではありませんが「まんま」と言えるようになりました。「電気（電灯）」「時計」「扇風機」と言うと、それぞれを指で指しますし、「じいじ」「ばあば」と言うと、私や妻の顔を見ます。日々成長し、できることがどんどん増えていっています。

孫とは反対に、私はできないことが増えています。どんなことができなくなったのだろうと考えると、全力疾走ができなくなった、階段を駆け上ることができなくなった、夜遅くまで起きていられなくなった、「どっこいしょ」と言わないと立てなくなった、手帳にメモしないとものを覚えられなくなった、肘が痛くてゴルフクラブが振れなくなった、人の名前が思い出せなくなった、と、どんどん出てきます。しかし、できなくなったことばかりではないはずだ。できるようになったことだってあるはずだと考えてみると、朝早く起きられるようになったことくらいで、他には思い浮かびません。

人は年をとることで変わっていき、できないことが増えていくようです。普段は気付かませんが、ある時「あっ」と気付かされ、落ち込むのです。これから年々、できなくなることが増えていくのだろうと思いますが、その分、できるようになることが増えていく孫の成長を楽しみに、日々過ごしていきたいと思っています。



特集

幼児教育センター調査研究事業

「幼保こ小の連携・接続に関する 実態調査」について

群馬県総合教育センター幼児教育センターでは、平成29年度に県内の幼児教育施設及び公立小学校にご協力いただき、「幼保こ小の連携・接続に関する実態調査」を行いました。この調査は、幼稚園、認定こども園、保育所、小学校における幼保こ小の連携・接続に関する現状を把握し、滑らかな接続を目指した環境整備や教育課程の編成・改善、教職員の交流の在り方等に関する情報発信と啓発資料作成に生かすために実施しました。

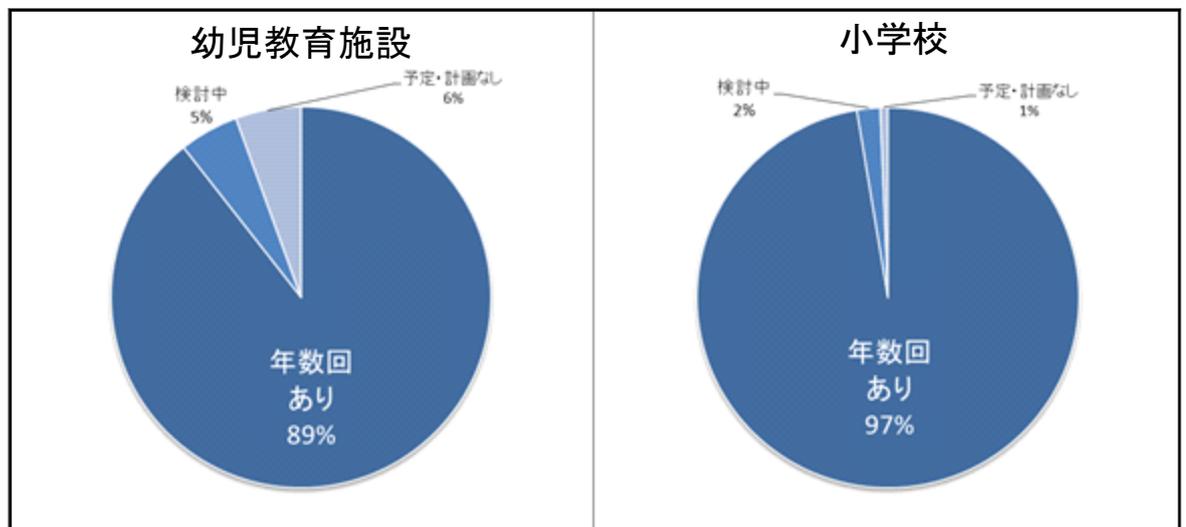
本稿では、実態調査のまとめと考察を行います。

昨年度の調査でご回答いただいた幼児教育施設及び学校数は次の通りです。公立幼稚園72園（回収率100%）、私立幼稚園34園（回収率44.7%）、保育所156所（回収率69.3%）、認定こども園116園（回収率97.4%）、公立小学校306校（回収率99.3%）。

1. 調査結果

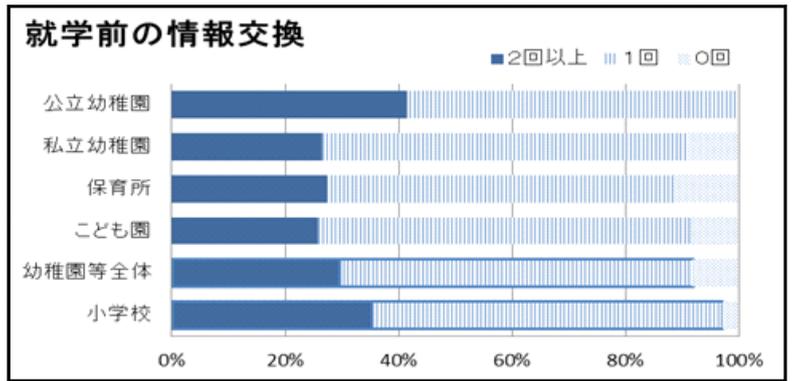
（1）幼保こ小の連携について

- ・「年に数回の参観、行事、研究会などがある」「連携に着手したいが、まだ検討中である」「連携の予定・計画がまだない」から一つを選択していただきました。
- ・「年に数回の参観、行事、研究会などがある」と回答したのは、幼児教育施設で89%、小学校で97%でした。



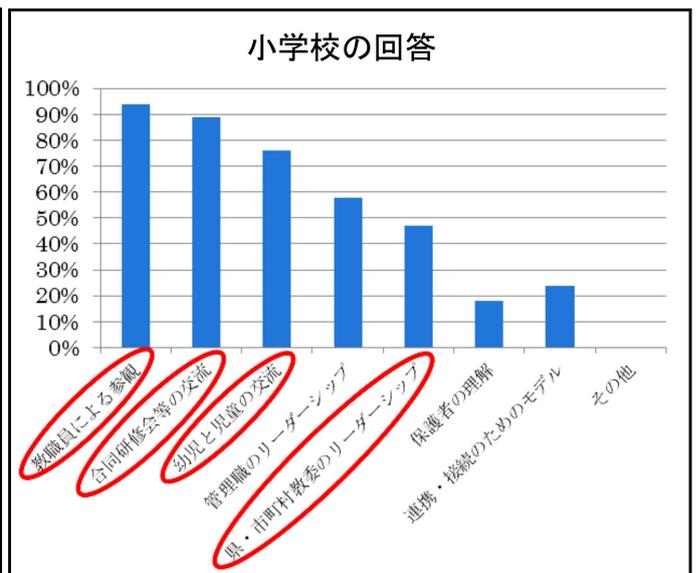
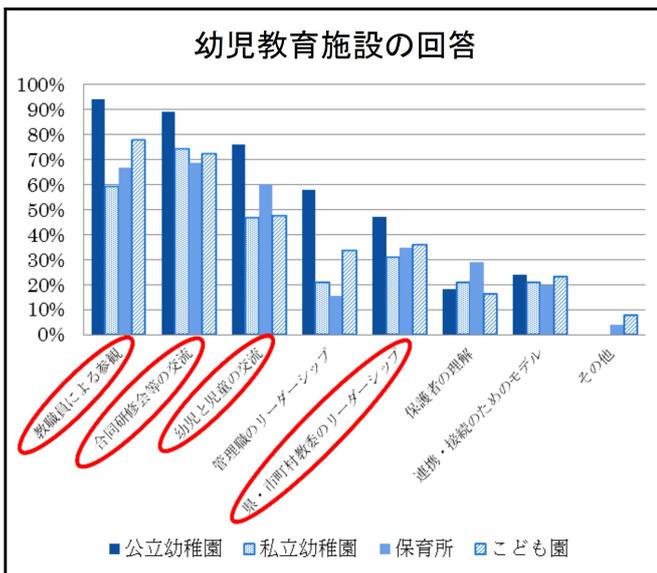
(2) 就学前の情報交換

- ・連携の内容について、幼児教育施設で特に多かったのが、「就学前の情報交換」でした。「年間2回以上」「年間1回」を合わせると、全体の92%の幼児教育施設が行っています。
- ・小学校の回答でも「就学前の情報交換」を97%の学校が行っており、最も多い連携の内容でした。



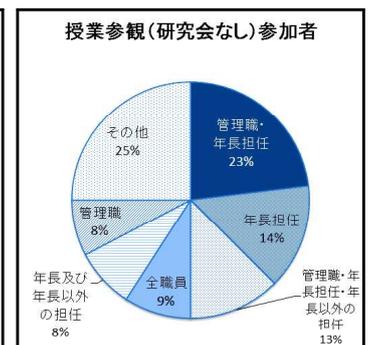
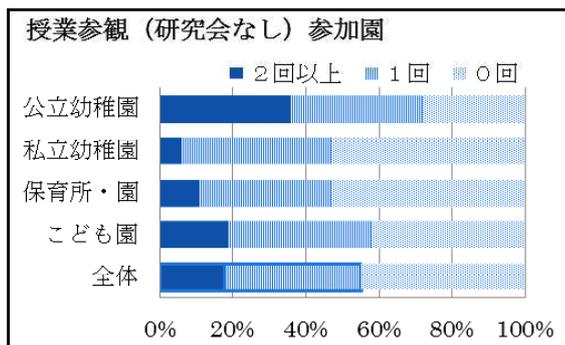
(3) 連携・接続を推進していくために大切なこと

- ・「小学校もしくは幼児教育施設と連携・接続を推進していくために大切なことは何ですか」という質問(複数回答可)に対し回答が多かったのは、「教職員による授業参観や保育参観」(幼児教育施設75%、小学校94%)、「合同研修会等による教職員同士の交流」(幼児教育施設74%、小学校89%)、「幼児と児童の交流」(幼児教育施設58%、小学校76%)でした。また37%の幼児教育施設、47%の小学校が、県や市町村教育委員会のリーダーシップを求めています。

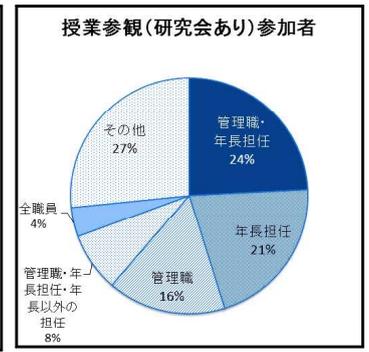
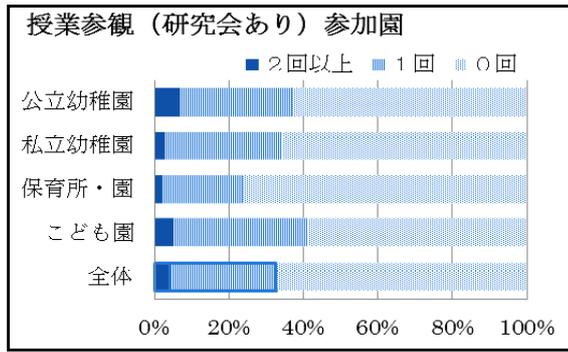


(4) 幼児教育施設の先生による小学校の授業参観

- ・研究会がない授業参観に参加している幼児教育施設の割合は、「年間2回以上」と「年間1回」を合わせて全体の55%でした。
- ・研究会も含めた授業参観に参加している幼児教育施設の割合は、「年間2回以上」と「年間1回」を合わせて全体の33%でした。
- ・参加者を見ると、研究会も含めた授業参観では、「管理職・年長担任」「年長担任

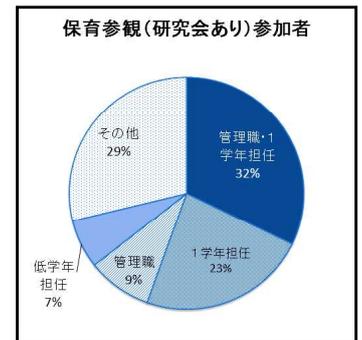
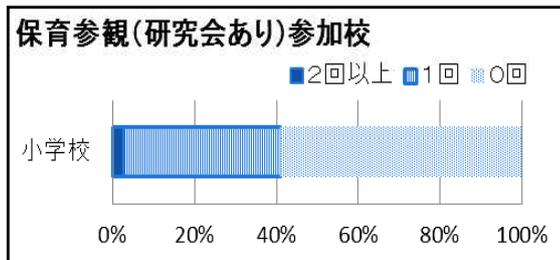
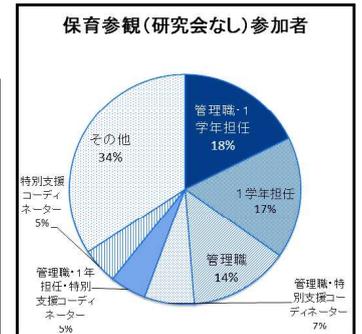
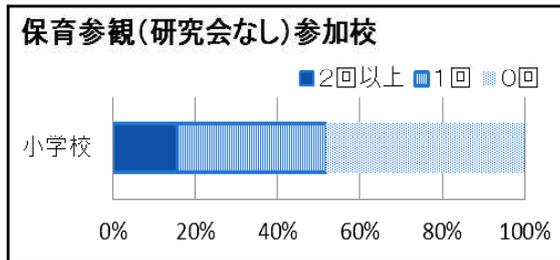


任」「管理職」で6割を越えています。研究会がない授業参観に比べ、参加者の職が限られる割合が大きいです。



(5) 小学校の先生による幼児教育施設の保育参観

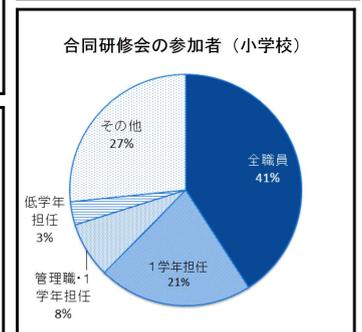
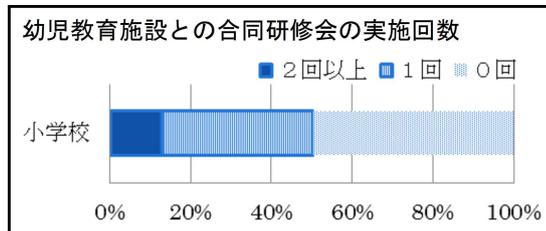
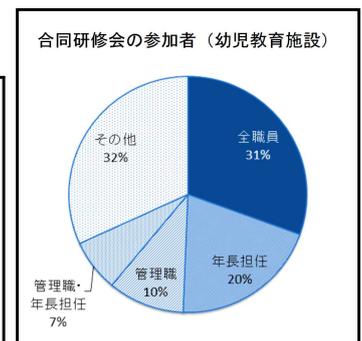
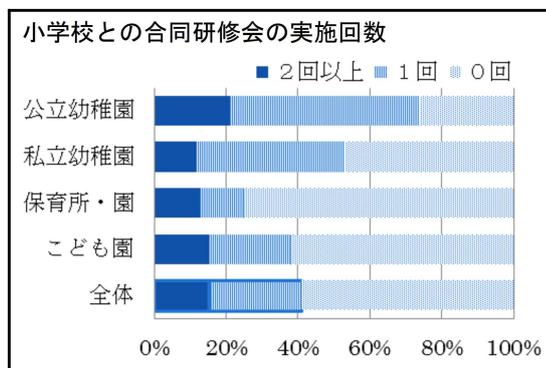
- 研究会がない保育参観に参加している小学校の割合は、「年間2回以上」と「年間1回」を合わせて全体の52%でした。
- 研究会も含めた保育参観に参加している小学校の割合は、「年間2回以上」と「年間1回」を合わせて全体の41%でした。研究会がない参観に対し研究会がある参観の参加割合が減るのは、



- 「幼児教育施設の先生による小学校の授業参観」と同様の傾向です。
- 参加者を見ると、研究会がある保育参観では、「管理職・1学年担任」「1学年担任」で55%であり、「管理職のみ」を加えると6割を越えます。研究会のない保育参観には特別支援コーディネーターが多く参加しているのが、小学校の特徴です。

(6) 合同研修会等の教職員の交流

- 合同研修会を実施していると答えたのは、幼児教育施設で全体の41%、小学校で50%でした。
- 参加者を見ると、「全職員」が参加をしているのは、幼児教育施設で31%、小学校で41%でした。



(7) 連携・接続を進めていくのが難しい理由

・「連携・接続を進めていくのが難しい理由は何ですか」という質問の自由記述欄には、幼児教育施設 57 園、小学校 37 校が記述しています。そのうち時間の確保に関することについての記述がそれぞれ 21 園、20 校でした。

<自由記述の内容（一部）>

- * 合同研修等を行うための時間を調整することが難しい。(幼児教育施設)
- * 園も学校も忙しく、連携・接続の時間を捻出するのが難しい。(幼児教育施設)
- * 教職員や児童、園児の交流する時間を確保するのが難しい。(小学校)

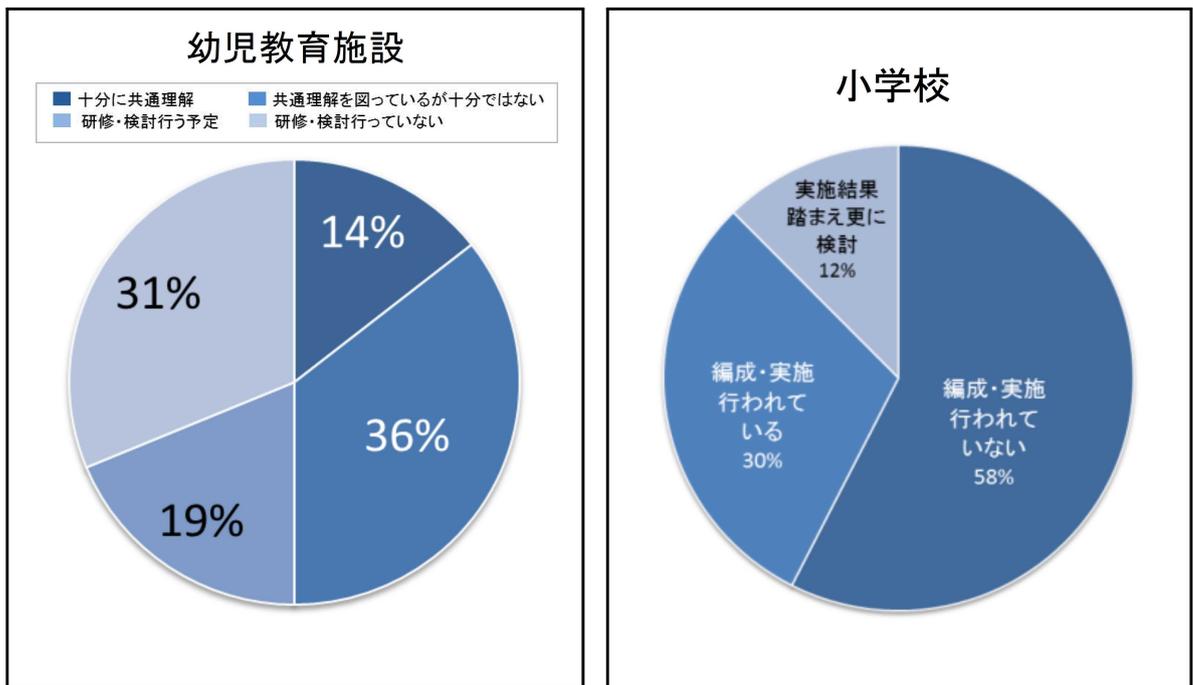
(8) 教育課程の接続

①幼児教育施設へ「教育課程の接続について研修や検討を行っているか」と尋ねました。

・一番割合が多かったのは、「研修や検討を行い、『スタートカリキュラム』、『就学を意識した5歳児後半の教育課程（指導計画）』について、共通理解を図っているが十分ではない」という回答で、全体の 36 %でした。一方、「十分に共通理解を図っている」と合わせると 50 %になります。

②小学校へ「連携・接続を見通した教育課程について、どの段階にあるか」と尋ねました。

・「編成・実施は行われていない」と回答した学校が、全体の 58 %でした。



2. 考察

調査結果から見てきたことは、次の通りです。

(1) 授業参観や保育参観

多くの幼児教育施設や小学校で、連携・接続の推進には教職員同士の参観の必要性を感じていながらも、授業参観や保育参観の実施率は5割程度です。参加者は、管理職や年長・第1学年担任、小学校特別支援教育コーディネーターが多いという特徴も見られます。これは、教職員が職場を離れて参観や研修を行う余裕がない多忙化の影響も考えられます。さらに、特別な支援を必要としている子どもに意識が集中していたり、多岐にわたる園務・校務分掌がある中で、担当教職員が代表して連携に関わることが多かたりするのかもしれませんが、しかし、子どもに関わるすべての大人が、子どもの成長してきた

背景や育ちつつある資質・能力を理解し、持っている力を発揮し子ども自ら伸びようとする姿を支える必要があります。すなわち、子どもに関わるすべての教職員が、互いの教育について理解を深めるために、参観を行うことが期待されるのではないのでしょうか。

(2) 合同研修会

連携・接続の推進には、研修会などを通して教職員の交流を深めることが大切であるという考え方が、各校種の共通の認識として読み取れます。しかし、合同研修会を実施している幼児教育施設は41%、小学校は50%でした。さらに、幼児教育施設の内訳を見ると公立幼稚園の合同研修実施率が74%に対して保育所は25%でした。記述回答に複数の保育所から、「近隣の幼稚園と小学校との連携・接続はたくさんあると聞いているが、保育所は交流する機会がない。文科省と厚労省との違いからであろうか?」「教育研究会に幼稚園は入っているが、保育所は入っていないので連携が少ない」という意見が出ています。小学校と所管を同じくする幼稚園に比べ保育所は、合同の研修会が持ちにくい状況が考えられます。そして、37%の幼児教育施設、47%の小学校が、連携・接続に係るリーダーシップを県や市町村教育委員会に求めています。

(3) 時間的制約がある中での研修

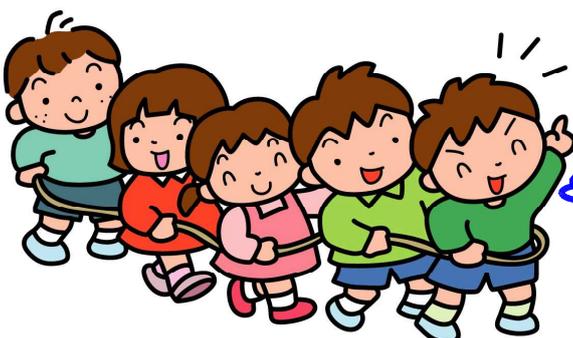
上述(合同研修会)のように、幼児教育施設と小学校それぞれの教職員が、互いの教育について理解を進める機会が少ないという状況があります。しかし、多くの幼児教育施設や小学校は、新たに研究会や研修会などの時間を生み出すことが難しいと感じているようです。時間的制約がある中で、いかにして相互理解を図る研修会等を実施し充実を図っていくかが、課題の一つとして挙げられます。

(4) 学びの連続性

国立教育政策研究所では平成27年に『スタートカリキュラム スタートブック』を作成し、全国の小学校、幼児教育施設に配布しましたが、今回の結果から実際にスタートカリキュラムの編成・実施に着手した小学校はまだ多くはないことが分かります。幼稚園教育要領等及び新学習指導要領で幼小の教育の接続が改訂(定)前よりも更に強調されており、接続期の教育の重要性の認識と学びの連続性の確保は、喫緊の課題と言えます。

3. 幼保こ小の連携・接続に関する本県の課題

- (1) 保育参観や授業参観の実施率向上と様々な立場の教職員による参観。
- (2) 相互理解に係る合同研修会や保育・授業研究会の実施・参加の促進と充実。
- (3) 時間的制約がある中での相互理解に係る研修の実施と充実。
- (4) 接続期の教育課程の編成及び実施の推進。



次回、臨時号(10月発行予定)では、明らかになった課題の解決に向けて、実践的取組の提案をします。

お楽しみに。